

## わたしと図書館

法学部3年

井上 健

自分にとって図書館は近いようで遠いような存在ではないかと思う。大学に入ってからというもの、図書館を利用する機会は増え、図書館が以前に比べ身近な建物になったことは事実であるけれども、それは「図書館」という建造物を利用する機会が増えたのに過ぎないのではないかと正直思う。なぜならば、僕が図書館を利用するのは、テスト期間中の自習の時であったり、パソコンを利用する時であったり、または特にすることがなく、ほんの休憩のつもりで立ち寄りたりといくつかの理由があるのだけれど、図書館の中にある図書を目当てとすることが、考えてみると自分でもびっくりするほど少ないことに気付いたからだ。だからもし、とても静かで、パソコンが利用できて、かつ少々の調べ物ができる建物があれば、そこが自分にとっては図書館であろうとなかろうと構わないのではないかと思う。もちろん、そのような環境を整えている場所こそ図書館ではないのか、そのような利用法も図書館の有効な利用法の一つだ、と自分に言い聞かせてはみても、自分がこの施設を利用するのにあたって、大学生なりに、と言ったら変だが、たくさんの本に囲まれていながらもそれらを利用しきれていないことは少し寂しい事ではないかと思う。

僕は以前から本をよく読むほうではなかったし、今でもそうではない。そんなとても図書館と縁が深いとはいえない自分でも、やはりあのやや長い階段を上って、自分の学生証を機械に通して、いざ図書館に入ってみるとつい襟を正したくなるような、気の引き締まる雰囲気があると思うし、その雰囲気が僕はとても好きだ。それは図書館を利用する際のマナーがそういう雰囲気を持たせているのかもしれないし、多くの学生が何かしらの目的を持って、それを静かな環境で集中してやりたいという切なる願いをお互いが共有しているからか、あるいは普通の図書館や本屋などとは違う、専門的な書物が多く存在するあの場所独特の緊張感が自分たち学生をやる気にさせるあの雰囲気を

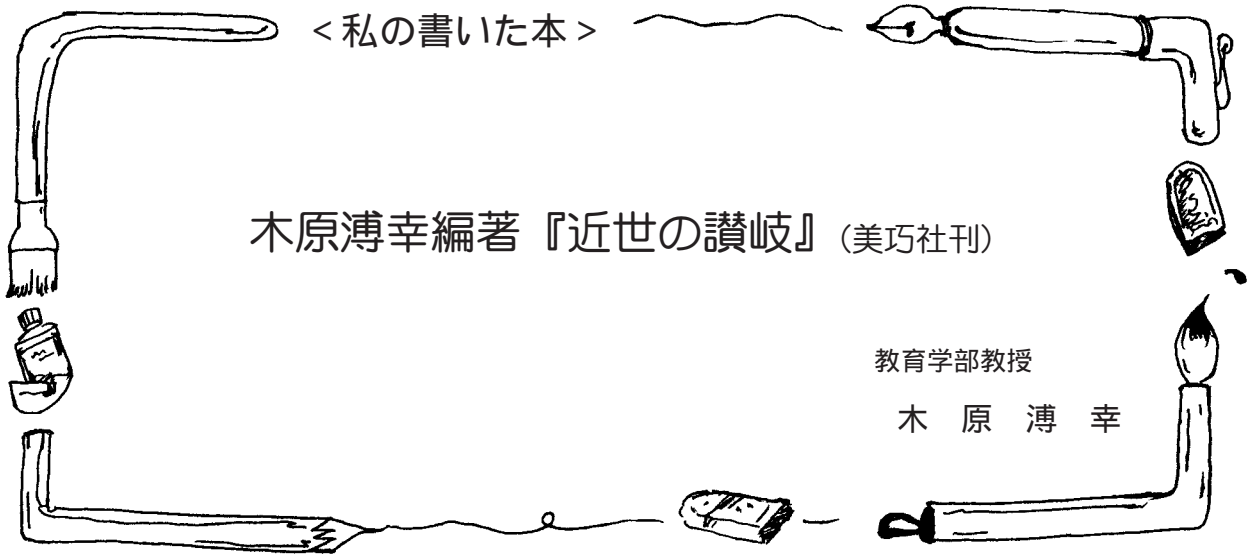
際立たしているのではないかと、とも思う。ひょっとしたらちょうど向かい側がとてにぎやかな食堂であることも少なからず影響しているのかもしれない。それは、それぞれ各人がどのように感じるかであって、僕にも当然のことだが分からない。しかし、重要なことは各々がそれを感じながらやる気を奮い立たせることではないかと思うし、実際に図書館内を眺めてみると、多くの人のやる気がひしひしと伝わってくる。

しかし、図書館の最大の魅力はやはり、そこに存在する数多くの書物だと思う。人と人との関わり合いでは、その人をどういう人なのかを知るためには、その人に関する話を聞いたりするだけよりも、その人に自分から話し掛け、交流を深めたほうが良い結果が得られることは明らかだ。それは図書館の利用にも言えるのではないかと思う。恥ずかしい話だが、僕は最近になって初めて2階より下に行ったのであるが、そこは光があまり差さず、時間の感覚があまり分からなくなりそうであった。そして、そこにある大量の本には、当然ながら自分の興味をそそられる本や、自分の専攻している分野の本がたくさんあるわけで、どうしてもっと早くこの場所を利用しなかったのだろうと後悔したものだ。やはり、図書館の魅力をもっと多く知するためには、1度図書館をくまなく見て回ることだと思う。それにより、薄暗い場所にあるいろいろな本が自分の興味、関心を掻き立てるのがその人本人にもよく感じられ、改めて図書館の魅力を見ることが出来ることだろう。

前にも述べたが、僕は本をよく読む方ではない。しかし、図書館はこれからもよく利用していきたいと思っているし、図書館のもつ雰囲気などもとても好きだ。また、図書館が今まで以上に利用しやすくなればよいとも思っている。それには、もっと多くの人に、学生はもちろんのこと、一般の方々にも広く利用されて、かつ利用者の幅広い意見をどんどん生かしていくことが大事であると思う。そのためには、そこに従事している人だけの努力

だけでなく、もっと多くの人が図書館のすばらしさを感じてもらい、それらの人がもっと図書館を利用しやすくしていきたい、という思いで意見を

出し合っていくことだ。それは多くの人が図書館を利用していく上での責任でもあると思う。



平賀源内や柴野栗山は讃岐の生んだ江戸時代の人物として著名であるが、かれらは江戸で活躍して名を残した。また讃岐で活躍した人物としては、松平頼重、向山周慶、久米栄左衛門らがよく取り上げられている。しかし、いうまでもないが、歴史上に名を残すこともなかった多くの人々によって、江戸時代の讃岐が経済的、社会的に発展したことを忘れてはならない。

本書はこのような民衆を中心とした讃岐の江戸時代を、政治・村・町・海・道・産業・民衆運動・宗教などの各分野から明らかにしようとしたものである。難解な表現は避け平易な文章によって、歴史に関心をもっている一般の読者に理解してもらえるようにとの意図で編集され、香川県の近世の各分野を専門に研究されている方たちによって共同執筆された。

内容構成は、一章讃岐の諸藩と政治 二章農民の姿 三章ため池と新田開発 四章町の成り立ち 五章漁業の発展 六章海と陸の道 七章讃岐三白 八章民衆騒動の展開 九章幕末讃岐の政治状況 十章宗教政策と民衆信仰 十一章学問と文化 十二章近世の考古学となっており、多方面から江戸時代の讃岐の実像を明らかにしようとしたものである。

年貢などの重い負担に苦しむ貧しい農民を、思い浮かべることが多い江戸時代であるが、内容構

成からもうかがえるように、米づくりのみで成り立っている社会ではないのである。関心のある方は是非一度手にとって、讃岐をとおして江戸時代という社会のありかたについて思いを馳せていただきたい。



『近世の讃岐』の表紙

<私の書いた本> は香川大学教官の著作物を著者に紹介してもらうコーナーです。